

令和元年6月24日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03108

研究課題名(和文)近代イギリスにおける動物福祉の歴史的生成 - 実践・制度・理念の総合的研究

研究課題名(英文)A history of animal welfare in modern Britain

研究代表者

伊東 剛史 (ITO, Takashi)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：10611080

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀から20世紀初頭のイギリスにおける動物福祉の展開を再考し、その新たな歴史像を探求した。具体的には、1)動物を資源として活用する社会基盤が整備される一方、動物倫理が議会政治の課題として浮上したこと、2)これを受けて、功利主義の原則に基づく動物処遇の法制度が確立したこと、3)この一連の過程において、国家、市場、チャリティの間の複合的な関係が結ばれ、動物福祉の制度と理念が構築されたことを、明らかにした。以上3つの論点から、動物福祉の歴史的展開を再検討し、近代イギリスの「人間と動物の関係史」を俯瞰する視座を構築することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

動物福祉の歴史に関する従来の研究は、個別事例の分析に終始するものが多く、個々の発見を統合するための視座を欠いていた。これに対して本研究は、動物福祉の中長期的な展開を理解するための、総合的な歴史像を描くことができたと考える。動物倫理に関する諸問題が社会の広範囲に影響を及ぼすには、動物の救済を目的とする様々な社会的実践だけでなく、それらの実践を動物福祉として規範化する制度を必要とした。さらに、そうした制度の構築は、「動物の権利」という普遍性を纏った理念の創出をともなう。この一連の歴史的ダイナミズムを解明することで、今日の動物福祉問題を考察するための、学術的検証に耐えうる視座を提供することができた。

研究成果の概要(英文)：This research project has contributed to deepening the historical understanding of human-animal relationships in modern Britain. Its goals were achieved by demonstrating how the use of animals was embedded into the social and spatial structure of the urban life, how the ethical notions such as the utilitarian or humanitarian treatment of animals arose against the exploitation of animal life, and how the idea of animal welfare was legally and morally enforced in various domains of civil life. The outcome of the research helps to understand the historical background of the present animal welfare issues.

研究分野：近代イギリス史

キーワード：イギリス 動物福祉 動物の権利 生体解剖論争 都市 動物観

## 1. 研究開始当初の背景

近年、動物処遇の倫理的問題に対する国際的関心の高まりを受けて、人間と動物の関係の歴史を学術的に考察する試みが始まっている。「人間と動物の関係史」と呼ばれるこの研究課題は、人類史の多様な時空間の中に展開する両者の関係を、個々の歴史的な文脈に再定位しつつ、総合的な視座を構築することを目指している。本研究代表者もまた、ヴィクトリア期ロンドン動物園を研究対象とし、科学史などの近接領域との連携を模索しながら、動物園の成立と発展の社会的影響を考察してきた。さらに、産業革命や階級社会といったイギリス史の重要テーマを取り込み、動物という視点から多面的な近代史像を描いてきたこれらの研究成果は、「人間と動物の関係史」が、歴史学を基盤とした学際的発展性を備え、豊かな学問領域を形成することを示している。

## 2. 研究の目的

研究代表者は、これまでの研究により次の3点を明らかにしてきた。(1) 19世紀前半、経済動物に対する「虐待」が、公衆衛生、犯罪予防、食肉供給といった都市ガヴァナンスの問題と結びつき、公権力の対処を必要としたこと。これが欧米諸国の中で、イギリスが早くから動物虐待防止法を整備した大きな理由である。(2) 動物実験(生体解剖)を規制した1876年法は、「虐待」という行為の反道徳性ではなく、動物が受ける「苦痛」を根拠とし、麻酔使用の原則を確立したこと。「虐待」を行う人間の側から、「苦痛」を経験する動物へと視点が変わったことは、動物福祉の歴史の大きな転換点である。(3) 動物福祉の理念と実践は、次の3つのアクターの競合的かつ補完的な関係の中で構築されたこと。その3つとは、動物を資源として活用する経済市場、それを規制しようとするチャリティ(王立動物虐待防止協会など公益を掲げる民間非営利団体)、関連法の制定と運用を担う国家である。このように、動物の資源的活用を促す制度と、動物の人道的処遇を定める規範とが、相互干渉を繰り返しながら展開し、「動物愛護の先進国」誕生へと結実する過程が明らかになってきた。

本研究の目的は、これらの成果に立脚し以下のアプローチをとることで、研究をさらに深化させ、近代イギリスにおける動物福祉の実践・制度・理念の総合的な歴史像を提示することであった。

## 3. 研究の方法

具体的に、本研究は次の3つのアプローチをとった。

(1) 19~20世紀イギリスにおける動物福祉の歴史的生成過程が、西欧近現代の「人間と動物の関係史」の重要な参照軸を提供すると想定し、その全体像を明らかにする。

(2) 研究全体を構成する以下の ~ の課題を設定する。これにより効率的に研究を遂行するだけでなく、総合的な理解の枠組みを提示する。

動物福祉の法制化において、大きなインパクトを残した生体解剖論争について、動物実験の賛成・反対の両方の視点から、この論争が当時のイギリスの動物観に与えた影響を解明すること。

公共文化施設としての動物園の影響力が現在よりもさらに大きかった19世紀都市社会の状況をふまえたうえで、動物園における動物展示やそれに関するメディアの報道などが当時の人々の動物観に与えた影響を検証すること。

イギリス国内の状況のみに着目するのではなく、ヨーロッパ諸国やアメリカ、日本との比較の視点を導入することで、イギリスにおける動物福祉の歴史の変遷の特質を明らかにする。その際、19世紀以降、グローバルに普及した都市型動物園を「人と動物の関係史」構築の一拠点として捉え、比較のための参照軸とする。

(3) 国際的な人的ネットワークを積極的に活用する。これまでに築いてきた海外研究者との交流を進展させ、動物・自然・環境を主題とする比較史や関係史の発展に寄与する。

## 4. 研究成果

初年度にあたる2016年度は、19世紀イギリスの動物福祉に関する構造的変化を、歴史的アクターの視点から捉え直すという試みを中心に研究を進めた。具体的には、進化論者チャールズ・ダーウィンによる『人と動物の感情表現』(1872年)に着目し、感情を科学的に解明するにあたり、それが当時の人々の動物観にあたえた影響を、とりわけ動物実験の是非をめぐる動物生体解剖論争との関係において、明らかにしようと試みた。その成果の一部を、「観察——ダーウィンとゾウの涙」(図書 b)として発表した。また、派生的な研究成果として、次の2点もたらされた。ひとつは、動物学の制度化と専門分科に関するものである。これは自然、動物、生命を理解するにあたり科学の影響力が増大したヴィクトリア期イギリス社会を総体的に

考察するうえで、重要となる研究テーマである。これに関して、化学史学会において研究報告を行った〔学会発表〕。もうひとつの派生的な成果は、イギリスとの比較の観点から日本における動物観の歴史的変容を考えるものである。これに関しては、カナダで開催された国際ワークショップ、およびアメリカで開催されたアメリカ歴史学協会年次大会において、旭山動物園を題材とし英語圏の動物園史との比較の観点から研究報告を行った〔学会発表〕。

2年目にあたる2017年度は、当初の計画どおり研究を進めるとともに、前年に得られた成果に対する諸方面からのフィードバックを活かし、本研究プロジェクトの広がりや意義を確認した。具体的には、前年度に公刊した共編著『痛みと感情のイギリス史』の3回の合評会を通じ、今後の研究の方向性について重要な示唆が得られた。そのひとつは、イギリスの動物福祉の歴史の大きな転換点となる、1876年の動物虐待防止法(動物実験規制法)の成立過程およびその社会的影響を、関係者の書簡等の新史料から再検討したものである。研究全体の成果は、本プロジェクト終了後に公刊予定の学術書(単著)として発表する予定であり、今年度は全体の構想を練り、一部原稿の執筆を開始した。また派生的な成果としては、19世紀イギリスにおける動物学会の発展と動物学の制度化との関連を議論した論文「19世紀のロンドン動物学会からみた動物学の制度化」〔論文〕、および現代日本の「人と動物の関係史」を旭山動物園を事例に、英米との比較の視点から議論した国際共著論集への寄稿論文「Flying Penguins in Japan's Northernmost Zoo」〔図書〕が得られた。

3年目(最終年度)にあたる2018年度は、補完的な史資料調査を行いつつ、本研究の総括を進めた。その過程で、本研究のテーマであるイギリスの動物福祉、およびサブテーマのひとつであるロンドン動物園についての講演の機会を得たため、本研究の成果を社会に還元するためのアウトリーチ活動にも取り組むことができた〔学会発表〕。さらに、ドイツの学術出版社De Gruyterより刊行予定のHandbook for Historical Animal Studiesに「動物園の歴史」についての章を寄稿する依頼をうけて、リサーチ対象を拡大したため、イギリス以外の地域にも視野を広げることができた。それにより、ヨーロッパ内外との比較の視点からイギリスの動物福祉の特性について歴史的な理解を深めることができた。年度内に初稿が完成し、今後編者からのフィードバックを得て原稿を修正後、2019年度に脱稿の予定である。前年度から取り組んできたヨーロッパとの比較の視点から日本の動物園史に取り組んだ論文「Flying Penguins in Japan's Northernmost Zoo」に関しては、編者の指摘を受けて改稿し、年度内に校了となり、2019年5月末に刊行された。以上のように、本年度は研究成果のとりまとめ、アウトリーチ、および派生的展開の追求について大きな進展があった。研究プロジェクト終了後に執筆予定の単著に向けて、十分な準備ができたと考える。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計6件)

Takashi Ito, 'Review of Gary Bruce, *Through the Lion Gate: A History of the Berlin Zoo*, Oxford: Oxford University Press, 2017', *English Historical Review*, forthcoming. 査読有

Takashi Ito, 'Review of Daniel E. Bender, *The Animal Game: Searching for Wildness at the American Zoo*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2017', *Isis* 109(2018) 432-433. 査読有

伊東剛史「19世紀のロンドン動物学会からみた動物学の制度化」『化学史研究』44(2017) 164-175. 査読有

Takashi Ito, 'The state and the popularisation of science in Victorian Britain: The Scientific and Literary Societies Act of 1843', *Historia Scientiarum* 25(2016) 216-251. 査読有

伊東剛史「(書評) Sarah Amato, *Beastly Possessions: Animals in Victorian Consumer Culture*, Toronto: University of Toronto Press, 2015」『ヴィクトリア朝文化研究』14(2016) 114-118. 査読無

伊東剛史「(書評) Ian Jared Miller, *The nature of the beasts: empire and exhibition at the Tokyo Imperial Zoo*, Berkeley: University of California Press, 2013」『科学史研究』277(2016) 388-389. 査読無

### 〔学会発表〕(計8件)

伊東剛史「動物園の価値と評価——歴史学の視点から」動物園学を考える会(日本大学)2019年3月16日、査読無。

伊東剛史「動物園と科学の関係——黎明期のロンドン動物園を題材として」日本科学史学会科学史学校(日本大学)2019年2月23日、査読無。

伊東剛史「イギリスにおける動物福祉の歴史——現代日本の視点から」動物観研究会公開ゼミナール2018(東京農工大学)2018年12月2日、査読無。

伊東剛史「科学の大衆化が専門分科と専門職業化に及ぼした影響——19世紀のロンドン動物学協会を事例に」日本西洋史学会・小シンポジウム「近代イギリスにおける科学の制度化と公共圏」(広島大学)2018年5月20日、査読有。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

伊東剛史「ダーウィンと「動物の痛み」——感情史研究の一事例として」第 11 会日本感情心理学会セミナー「感情と歴史」2017 年 11 月 25 日、査読無。

Takashi Ito, 'Penguin parade and flying seals: "the cult of the cute" in Japan's northernmost zoo', Panel on 'Zoos and Global History', 131st Annual Meeting, American Historical Association, Denver, 2017 年 1 月 5 日、査読有。

Takashi Ito, 'The secrets of beastly business: economy, industry and animal life in Japan's Northernmost zoo', Zoo Studies Workshop, 'Thinking With Human and Nonhuman Animals: Zoo Studies and a New Humanities', McMaster University, Canada, 2016 年 12 月 2 日、査読無。

伊東剛史「19 世紀のロンドン動物学協会からみた動物学の専門分科」化学史研究発表会年会シンポジウム「近代イギリスにおける科学の制度 専門分科と公共圏」(三重大学) 2016 年 7 月 9 日、査読有。

〔図書〕(計 3 件)

Takashi Ito, 'Flying Penguins in Japan's Northernmost Zoo', in Tracy McDonald and Dan Vandermers (eds) *Zoo studies: a new humanities* (Montreal: McGill -Queen's University Press, 2019) 237-261. 査読有。

伊東剛史「解説 なぜ今、感情史なのか」ウーテ・フレーフェルト(櫻井文子訳)『歴史の中の感情——失われた名誉 / 創られた共感』(東京外国語大学出版会、2018 年) 209-216. 査読無。

伊東剛史、後藤はる美編『痛みと感情のイギリス史』(東京外国語大学出版会、2017 年) 執筆担当箇所:(a) 伊東剛史「無痛症の痛み」5-13;(b) 伊東剛史「観察——ダーウィンとゾウの涙」215-59;(c) 伊東剛史、後藤はる美「痛みと感情の歴史学」269-330. 査読有。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8 桁)：

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。